

まんだら通信

第161号 (通巻193号)

平成21年(2009)11月 佛誕2575年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

昭和天皇ただ国民とともに

今年は今上陛下のご即位二十年だそうですね。

記念切手が発行されるほか、今月十二日には皇居への参賀を始め、いろいろのお祝いが予定されています。

王室のある国は現在世界で二十カ国ほどありますが、その国の歴史始まって以来、二千六百年もの長い間、途絶えることなく一つの家系が連綿と続いているのは日本以外にありません。

大東亜戦争に敗れたとき、昭和天皇は「責任をとって退位することも考えたが、それよりも全国をくまなく巡って国民を慰め励まし、復興の手助けをすることが私の第一の責任と思う。」と仰せになりました。

世界の常識では、戦争に負けた国王や皇帝は国外追放や亡命、悪くすれば一族処刑の運命が待っていました。

昭和天皇のご希望を聞いた占領軍は、



「近眼で猫背のヒロヒトを間近に見れば、天皇への信頼がいつべんに崩れるだろう」という思惑もあって、『全国ご巡幸』は実行されることになりました。

昭和二十一年二月十九日、神奈川県川崎市を皮切りに二回の中断を挟んで約九年、沖繩を除いて昭和二十九年八月の北海道まで巡幸されました。

尚、沖繩に行けなかったことが最後までお心残りだったそうですが、「ご入院になったとき」「もう、だめか」と仰せになったそうです。侍医団は、「ご自分のお体のことをご心配になったのかと思っただけですが、それは「沖繩行きは」もうだめか」という意味だったそうです。

硫酸(窒素肥料)を生産していた川崎の昭和電工では、居並んだ工員達に「日々の食料はどうか」、「家は大丈夫か」と身近な質問ばかりされ、茨城の常磐炭鉱では地下四百五十メートル、温度四十度の坑内を背広にネクタイで激励され、感極まった上半身裸の鉱員達の「万歳」の音が轟いたそうです。

この他、引き揚げ者の開拓団、孤児の収容施設や、長崎では藤山一郎さんが歌った『長崎の鐘』のモデルで『この子を残して』の著者、永井隆教授をベッドにお見舞いになるなど、お人柄にふさわしい暖かい訪問が続けられました。

では何故、行く先々でもみくちやになるほどの歓迎を受け、再三禁止されている日の丸と君が代の大合唱が起きたのでしょうか。

女官があるとき「襟がほころびていまずので、洋服を取り換えましょう」と申し上げたとき「内にいるときはこれで結構。」と繕った襟のまままで過ぎられたとか。また戦後すぐの頃、記者団が「陛下、お食事はどのようなものを」と質問したとき「すいとんや雑穀の雑炊です。」と答えられたそうです。

見せかけを取り繕うことを深く思わ

ず、質素、儉約、勤勉、自分より他人を先にと、日本人が理想と思う生き方をなさっていたのです。

記者団から、日頃の質素なご生活について質問があったとき「わが家の家風だから」とこともなげにお答えになったそうですが、つまり二千数百年、ただ国民の身の上を思いを巡らしてきたご家系ということを知っていたから、国民は間近に接することで感動したのだと思います。

インターネットには、次のような話が紹介されています。

昭和24年5月22日に立ち寄られた佐賀県基山町の因通寺には、40余名の戦災孤児のための洗心寮があった。孤児たちの中に、位牌を二つ胸に抱きしめていた女の子がいた。

昭和天皇は、その女の子に近づかれて、「お父さん、お母さん？」と尋ねられた。「はい、これは父と母の位牌です」とはつきり返事をする女の子に、さらに「どこで?」

「はい。父はソ満国境で名誉の戦死を遂げました。母は引き上げの途中病気のために亡くなりました。」

天皇は悲しそうな顔で「お寂しい?」と言われると、女の子は首を横に振って、「いえ、寂しいことはありません。私は仏の子です。仏の子供は亡くなったお父さんとも、亡くなったお母さんともお浄土にいつたら、きつともう一度会うことができます。」

昭和天皇は、すつと右の手を伸ばされ、女の子の頭を二度、三度と撫でながら、「仏の子供はお幸せね。これから立派に育つておくれよ」と言われた。数滴の涙が畳の上に落ちた。「お父さん」、女の子は小さな声で昭和天皇を呼んだ。

「元首としての天皇」よりも、ひとりの人間として、菩薩のように生きたそのお姿に、この上ない親しさと尊敬を覚えるのは、私だけではないと思います。

行って参ります。主な目的は『あそか基金』の奨学生に会って励ますためですが、お陰さまで今年は25人になりましたので、お世話をお願いしているアンギラサ師は、お食事会などどうでしょうかとメールで知らせてくれました。長く続いたゲリラともめ事もなくなって、平和を噛みしめていることでしょう。

◆『昭和天皇三十二の佳話』(加瀬英明 実業之日本)を読みました。平成の私たちが見失った日本人の美徳を、見事に体現されているお姿を「感動と微笑みのエピソード」で綴っています。どうぞ一読を。 09.11.09 龍渉

スイセンについては、以前も取り上げたことがあります。この花が咲き始めると、暖かな南房総も晩秋の実感が湧きますから不思議です。

地中海が原産だそうですから、シルクロード沿いにシナに入り、観賞用として来日したものが野生化したのだということです。

毒を持っていることも有名で、特に球根のリコリンは猛毒だそうです。致死量は10グラムだそうですから、小さな子が口に入れることがないよう、気をつけたいといけませんね。

◆以前お知らせした通り、今月19日から29日までスリランカに

◆今年スイセンの花が11月3日、文化の日に咲き始めてビックリしました。

例年よりも、2週間ぐらい早いのではないのでしょうか。

こういう話をすると、『地球温暖化』やCO₂(炭酸ガス)と結びつける人がいますが、私は「?印」だと思っています。

以前のような冬の厳しい寒さを感じない反面、かつての夏のように夜になっても寝苦しくて困るということは、何年も前からありません。

館山湾にサンゴ礁があった頃は、今より遥かに暖かかったはずですから。



余滴

につぼん人情小噺

第四十七話 校庭

スポーツの秋、皆さん、いかがお過ごしでしょうか。

地方を旅してきますと、あちこちの学校の校庭で運動会が行われていて、車の窓から見ていて、なんだかとてもうれしい気持ちになるのは、どうしてなのでしょうかね。

ちよつとお聞きしたいのですが、皆さん、運動会は裸足で走った時代ですか？それとも、運動靴でしょうか？

私は、「裸足足袋」という、底にギザギザのゴムがついた、小さな地下足袋のようなものを履いた記憶があります。

思い出すでしょうか？ 校庭の人口に入場門が作られまして、赤い帽子、白い帽子の子供たちが整列して入場しましてね。いやあ、あの頃の私、かわいかったなあ、なんて。

校庭……。いい言葉ですよ。いま、校庭で遊ぶ子がいないので、芝生にするという運動が鳥取県や歌山県などを中心に広がっているんだそうですね。実際、校庭を芝生にしたら半年間で五メートル走が平均で一秒近く早くなったという話も聞こえてきますから、芝生化は大成功ということになりますけど、なんかねえ、そこまでしないといけないんでしょうかと思えますが……。

今日は、PTAが力を合わせて校庭を拡張したという話を仕人れましたので、書いてみたいと思います。

それは、今から五十年ほど前に、鹿児島県曾於郡（現曾於市）大隅町で起こった話です。

この、のどかな町の恒吉小学校には、当時約三百人の子供たちが学んでいま

た。校庭はとても狭く、休憩時間になると、ドッジボール、鬼ごっこ、陣取り合戦などで遊ぶ子供たちでひしめきあうほどでした。

運動会ともなると大変です。保護者たちは座るためのゴザを敷く場所がなく、まわりの土手で見学する始末でした。

「PTAでどしてんやらんにやいかん（なんとかしなくてはいけない）」

そう思ったのが、篠原春夫さんでした、学校の先生や仲間を集め、恒吉小学校校庭の拡張を始めたのです。もちろん、村の予算もありません。

まず、最初の問題は、校庭の隣の丘の上の二軒の家でした。この二軒の了解がなければ、拡張どころではありません。篠原さんは、その難題にも挑戦したのです。しかも、そのうちの二軒は篠原さんの恩師でもありました。恩師は、その時、こう言いました。

「正直言つて、先祖代々、長年住んできたこの家を捨てたくない。だが、子供たちのことを第一に考えよう。だから、代替地を見つけて、引越そう」

もう一軒には、おばあさんが一人で住んでいました。でも、こう言いました。「子供は村の宝でしょ。私はもういい年ですから、故郷に帰りましょう」

ふたりの家は「子供たちのために」取り壊され、土地が無料で提供されました。でも、それからが大変でした。まず、作業の道具がありません。すると近くの集落からモッコ（ワラで編んだ丸いカゴで天秤棒を通して担ぐ道具）が山ほど提供され、毎日毎日、約十人のPTAの人たちが整地作業に入りました。

それにしてもスコップや鍬といった人力で丘を壊すのは大変です。そんな時、

県の公団がブルドーザーと運転手を提供してくれたのです。

そこに大問題が生じました。削った大量の土砂をどこに捨てるかです。考えに考えたあげく、川に捨てることになりました。ところが、そうは簡単にはいきません。土砂は川の流れを変えてしまう可能性がありますからです。

当然、県からお叱りを受けます。「なんか川がおかしいと思つていたら、お前たちが毎日、こんなことをしていたのか！」

それはそれは、激しい叱責でした。法律も知らず、何も考えなかった自分たちが悪いと、篠原さんたちはただただ頭を下げるしかありませんでした。

「絶対、許さん。お前たちのやったことは犯罪だ！」

県の関係者の怒りが絶頂に達した時、ブルドーザーの運転手が立ち上がりました。

「みんな、子ども（子供）のためにやっちよるのに、文句言うのは誰か！」

たしかにいけないことはいけません。だが、だつたらどうしたらいいのか、を

いつしよに考えるのが県の仕事だろう。とブルドーザーの運転手は言いたかったのかも知れません。運転手はこの学校とは無関係です。でも、篠原さんたちの情熱に次第に巻き込まれていたのでした。

それから、雨が降るたびに、毎晩、PTAが総動員で「がんばろう」と呼ばれる提灯を手に川に行き、氾濫が起らないか見守りました。

また、工事の途中で固い岩盤に突き当たったり、さまざまな問題に直面しました。しかし、その度にPTAは団結しました。それは「今の子供たちのために」「次の時代の子供たちのために」という大義でした。

金があれば汗を流す。一人で出来なければみんなやる。いま、自分が協力できることは何か、全員で考えました。

こうして約二年余、事故もなく、みんなの力で校庭拡張がようやく実現しました。

子供たちは大喜びです。学校でも講堂で完成祝いをして、篠原さんたちPTAの人たちは、男泣きに泣いたそうです。篠原さんは、現在九十歳。ゲートボールのついでにこの校庭を訪れては、昔を懐かしんでいるそうです。

ところが、いまは統合によって、校舎そのものは取り壊されてなくなっているというのは、時代の流れでしょうか。学校がなくなつて、思い出だけが残っています。

皆さんが通つた小学校がもし、残つていたら、一度、校庭を訪れてみたらどうでしょうか。

誰にも、ただ懐かしいだけでなく、きつと新しい発見がありますよ。

校庭には、そんな「力」があると思うのですが……。

今月も、落語家三遊亭鳳豊さんのご好意で、月刊誌『MOKU』十一月号からの転載です。

鳳豊師匠は、「落語界から直木賞を」をモットーに執筆活動に励んでおいでですが、毎月心がほっこりと暖かくなるお話を書いてくださいます。